

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第601号 2019年11月10日

「この世を超えたいのちのきずな」

主任司祭 ミカエル鈴木真

今年も死者の月である11月を迎えました。カトリックにおける死者への向かい方は、わたしたちの信仰と深く結びついたものであると思います。聖書は「いのち」とはこの世限りのものではない、と教えます。葬儀の時によく言うことですが、新約聖書で「いのち」と訳された言葉はギリシャ語の「ゾーエ」という単語で、いわゆる“この世で肉体を維持する生命”を表す言葉とは別のものです。「ゾーエ」とは“神との結びつきによって生かされるいのち”という意味で、本当のいのちは神のみが持っておられ、その神とつながっていることによってわたしたちに与えられているもの…ということです。要するに神さまとの「きずな」ですね。そして神は永遠である方なので、その「いのち」も「永遠の命」と言われます。違う言い方をすれば、神さまはわたしたちがこの世を去った後もずっとわたしたちとつながり続けていてくださる、それによってわたしたちは、この世を去った後も神さまのみもとで、ずっと存在し続ける。そして、この世に生きるわたしたちも、その神さまとのきずなを通して、この世を去った方々とずっとつながり続けている…ということです。だから、カトリックではこの世を去った方々にこの世で生きるわたしたちを支え、わたしたちのために祈っていただきましょう、という「取次ぎの祈り」を盛んにするわけです。「死」が終わりではなくその先があ

る、死者ともいつもつながっている。その信仰は、実にわたしたちの強みであると思います。もちろん親しい方を亡くすと悲しいダメージを受けますが、それで終わりじゃないという希望がいつも与えられている。我々司祭はミサの中で亡くなった方の追悼をよく頼まれるわけですが、わたしは追悼をお祈りする時、むしろその亡くなった方に語りかけます。「〇〇さん、どうぞご家族の皆さんを神さまのみもとで支えてくださいね。そして、わたしの大切な方々もそちらにいっぱいいます。どうぞ一緒に、わたしたちを支えてください」と。つまり、わたしも（変な意味ではなく…）亡くなった方の存在をいつも身近に感じています。今年も死者の月にあたって、わたしたちに与えられた「この世を超えたいのちのきずな」を思い起こして感謝し、亡くなられた方々の永遠の安息と、そして豊かな取り次ぎを共に祈りたいと思います。